

# 商人としての書肆と流通

柏 崎 順 子

江戸時代初期、出版が開始されて後、商品である版本がどのようなしくみにおいて流通していくのかについては、必ずしも明らかではない。出版が京都で開始されたことは、技術的には印刷術が主に京都の寺院等に存在していたこと、文化的営為が歴史的に積み重ねられてきた空間であることから、テキストの確保が容易であったこと、同様の理由で読者が存在した場所であることなどから、ごく自然な成り行きといえようが、次に本格的な出版が開始されたのは江戸であった。しかし当時、新興の都市として建設途上であった江戸に、京都のように出版の条件がすべて揃っていたわけではなかった。特に出版という事業にあたり重要な要素であるテキストの確保は、文芸活動の歴史的背景の存しない江戸においては喫緊の課題であったことは想像に難くない。その課題について万治・寛文期に独特の打開策を打ち出して営業に成功していたのが、江戸ではじめて本格的な江戸資本の書肆として登場してきた松会等である。松会と、その営業上のグループと目される書肆である山本九左衛門、本問屋等は、京都で出版されたテキストを、その元版との何らかの結びつきのなかで利用するシステムを作ることに成功し、出版を行っていたと考えられるのである。その成果としての出版が、独特の造本様式を持ついわゆる江戸版である。この江戸版をめぐる出版状況は、少なくとも京都と江戸の一部の書肆においては、すでに地域の枠を越えて営業上の交流が行われていたことを示唆している。そしてこの江戸版が成立することを可能にした京都と江戸の書肆の関係は、当時の版本の流通の仕組みとも無関係ではあるまい。というよりは、いわゆる江戸版の作成を可能にした当時の出版界の成り立ちや仕組みとでもいうべきものが、商品開発の結果生じたジャンルの生成や流通の在り方を規定していたと考えるのが的を射ているように思われる。江戸版を出版した江戸の書肆、あるいはその元版である京都の書肆たちは、京都で最初に登場してきた書肆たちからやや遅れて現れはじめ、整版が本格的に行われるようになった時期以降に登場してきた書肆たちである。この新たな、かつ同時期の書肆の登場が何かその基盤として共通の属性を有することを思わせる

のである。そしてその属性と当時の出版界における営業の仕組みとは有機的な関係にあると考えられる。

筆者はこれまでにこの共通の属性の存する可能性の根拠として、出版界の第二世代として登場してきた書肆が、商品開発、より具体的にいえばテキストの開発において、独自の仕組みを築いていることを指摘している<sup>(1)</sup>。これら新興の書肆は娯楽に供するような本の開発に意を注いだのであるが、その手段として、京都で古くから営業していた絵屋や、絵画と密接に関連のある扇屋などが有していた絵手本のようなものからテキスト及び挿絵を入手していた可能性については以前より指摘されていた。しかし同様のテキストソースを利用していても、いわゆる浄瑠璃本屋と、舞の本や仮名草子を出版する書肆とは、異なるルートで入手している可能性が高いのである。たとえば京都版の舞の本のテキストが、そっくりそのまま江戸版を作成する書肆によって利用され、出版された際、江戸の同じ町内、ないしは近接する町で営業する浄瑠璃本屋が江戸版舞の本のテキストを利用している形跡は無い。そのことはそれぞれのジャンルの本文の比較によって明らかであり、舞の本、ないしは仮名草子と、浄瑠璃の正本は、それぞれ独自の本文系統を形成しており、京都と江戸における繋がりもそれぞれのジャンルで独立して存在していると考えられるのである。舞の本や仮名草子を出版する書肆は、物の本も手がけているような書肆であり、一方浄瑠璃本屋は、ごくわずかの例外を除いて浄瑠璃の正本に特化した出版を行う書肆である。

この点におけるカテゴリーの相違が、出版界が後に草紙屋と物の本屋という二つのカテゴリーに発展していく素地になっていると考えられる。つまり寛永頃から第二世代として登場してきた書肆のなかの娯楽に供するような本を出版する書肆たちのなかにも二つの系統があり、それぞれが独自のテキストの入手法や流通ルートを形成していると考えられる。なかでも後に草紙屋というカテゴリーの書肆になっていく者たちが、大伝馬町界隈で営業していた山本九左衛門や鶴屋喜右衛門、鱗形屋などであるが、彼らがこの界隈で営業していたということが、草紙屋というカテゴリーを形成する何らかの要因となっているとも考えられるのである。後に登場してくる書肆蔦屋重三郎も天明三年、丸屋小兵衛の店と蔵を買収して通油町に移転したことが草紙屋としての画期となる。鈴木俊幸は蔦重について、『近世物之本江戸作者部類』に「天明中通油町なる丸屋といふ地本問屋の店庫奥庫を購ひ得て開店せしより其身一期繫品したり」と記載されていることを紹介したうえで、「この年九月の丸屋小兵衛の「店庫奥庫」の購求は、おそらくたんに便利な土地に足場を得たと

いうにとどまらず、地本問屋としての営業にかかわる、たとえば流通や出版についてなにがしかの権利を手にいれたものと考えられるべきであろう。名実ともに、吉原の本屋から、江戸の地本問屋へと転身したことになる」<sup>(2)</sup>としている。通油町は大伝馬町に隣接する草紙屋が集住している空間である。すなわちこの通油町を含む大伝馬町界限という空間は、江戸初期に江戸で出版が本格化していく段階から、商品の流通や出版そのものの営業を成立させる要因を有している場所であり、その機能は江戸後期まで存続していた空間なのではないかと推測されるのである。

### 商人としての書肆

こうした新興の書肆たちはまた、同時期にあらたな時代の到来に即して営業を展開し始めた商人全般の動向と無関係ではあるまい。江戸時代初期、戦乱の時代が終息し、幕藩体制のもと、都市の建設や制度の整備が進展しつつあった環境において、商人たちは独特の商法や販路の開拓をはかり、商品経済の礎を築いていくのであるが、その典型的な例が伊勢商人である。江戸についていえば、入府した徳川家康は直ちに伝馬制の整備を開始し、三河出身とされる馬込勘解由等に伝馬役の支配を命じているが、慶長十一年の江戸城拡張工事の際、郭内の町家を郭外に移転させた折、伝馬役は大伝馬町・南伝馬町および小伝馬町に移転した。寛永年間には馬込の配下の升屋七左衛門・久保寺喜三郎・赤塚善右衛門・富田屋四郎左衛門の四軒が本綿問屋として営業を開始するが、これらの商人はむしろ町年寄・伝馬行事などの役割を担い、商人たちを統率する役割をはたしていたのであり、そのうちの升屋と富田屋は伊勢出身である。その後、貞享三年には川喜田・長谷川・小津等の本綿仲買であった伊勢商人を多く含む七十人が本綿問屋になるが、元禄年間に多数の店が廃業し、営業譲渡が行われ、残った十八軒のうち十二軒が伊勢出身の商人であったという<sup>(3)</sup>。これらの商人は大伝馬町界限に集中していたのであり、そのやや西側には伊勢町があり、ここも伊勢商人が集住していたための町名であるという。江戸初期日本橋界限はほとんどが伊勢商人で占められていたのである。

ちなみに松会という本格的な江戸資本の書肆が伊勢出身の可能性が高いことは、ご子孫に伝わる口碑や、伊勢あるいは江戸の菩提寺の過去帳等の資料により、以前指摘した通りである。初代松会市郎兵衛が出版した本には住所の記載がなく、その営業場所は不明だが、元禄期になると三代目と考えられる松会三四郎が出版した本の奥付に長谷川町という住所が記載されるようになる。長谷川町は大伝馬町三丁目と並行した三本銀座寄りのところにあり、大伝馬町や通油町と近接した町である。

松会が初代から長谷川町で営業しているか否かは不明だが、いずれ日本橋界限での創業であろうことは、グループになっている他の書肆の住所が大伝馬町辺であることから、ほぼ確実であろう。

その点に着目して、これまで初期出版界と伊勢というテーマで考察を重ねてきた。伊勢と俳諧、伊勢と印刷技術、伊勢商人と江戸版作製に携わった書肆たちとの関係等である<sup>(4)</sup>。これらは、江戸初期に江戸で出版を開始した書肆たちを、書物という商品売って利益を追求する商人であるという観点から考察することで、その動向を再検討したものである。これらの考察を踏まえ、江戸初期、本格的な出版を開始した江戸資本の書肆の多くが営業していた場所である大伝馬町界限の商人全般の様相を、あらためて見直してみる必要があるだろう。

### 他業種と書肆との関係

書肆と他の商売の関係性については、鈴木俊幸に江戸後期の薬品や小間物の流通と書籍の流通の関連を論じた研究がある<sup>(5)</sup>。江戸後期の草紙類の奥付や広告の多くの事例から江戸や地方において草紙類と小間物あるいは薬品はいわば同類の商品として扱われ、小間物の流通において草紙類が流通している実態を明らかにしているのである。

鈴木は、版本の奥付に記載された「書肆」たちが、実は小間物屋であったり、小間物屋と兼業の書肆という業態である多くの事例を紹介している。

この小間物屋という商売については、興味深い事実を指摘することができる。

江戸初期の江戸の商人といえば、木綿商がその代表的な職種であることは言うまでもないが、その他に都市として発展する江戸の需要に応じた雑多な生活必需品を扱う商売もまた、大伝馬町辺を含むところの日本橋界限で行われていた。こうした様々な商品を扱う江戸の間屋を諸色問屋という。林玲子によれば、

元禄頃までに江戸で諸色問屋といわれた商人は、米・繰綿・木綿・油をはじめ、各種の上方商品を扱うと同時に、東国各地の取引先からの出荷商品の売り捌き、上方への注文の取次ぎ、代金の支払い、運賃の立替えなど、各種の業務を遠隔地間商人に代って行った。(中略) これらの問屋は、特定商品を扱う専門問屋ではなく、荷受問屋として荷主と注文主との間を仲介し、口銭を受け取ることによって営業を継続する<sup>(6)</sup>。

このような荷受問屋，すなわち荷主と注文主とを仲介して得る口銭を利潤とする問屋は，元禄期を境に衰退し，自己資本で商品を生産地から仕入れ，仲買・小売に売り捌く問屋である仕入れ問屋に移行していくというが，その際，商品の内容に変化が生じたわけではなかった。林によれば，元禄七年に結成された仕入れ問屋の仲間である江戸十組問屋仲間を構成する通町組および内店組は，明暦以前には成立していたと考えられ，この両者が合体したものが三拾軒組諸色問屋である。その扱う商品は貞享二年の商壳体書上げによれば，「一繻子・純子・繻珍類 一加賀羽二重類 一紗綾・綸子・縮めん 一関東織絹物類 一京機棧留類 一帷子類 一けさ衣類 一晒布類 一真綿・繰わた 一木綿類 一小万物類品々（中略）此外ニも商売品余多有之候」とあり，さらに享保四年の書き上げによれば，前記の商品の他に扇子・水引・線香類・下り笠・足袋類・綿油・下り蠟燭類・素麵・傘・雪駄類・きせる・櫛・針類・剃刀類等の諸商品を含むことを指摘し，「単なる同業者の仲間とは思えない多種の商品を扱う問屋を包含している。享保改革の時，通町組・内店組に属していた問屋が「木綿問屋仲間」「絹紬問屋仲間」「繰綿問屋仲間」「晒問屋仲間」あるいは小間物・きせる・水引・扇・鏡の各問屋仲間として数種の問屋帳面に名を連ね，それを包含した形で三拾軒組諸色問屋が存在していたのはこのためである」とする<sup>6)</sup>。この通町組・内店組というのは地理的な区別であり，両者を合わせると大伝馬町界限を含む日本橋の北側一体となる。この辺りの商人たちが，問屋の性格が変化した元禄以降も小間物を含む雑多な商品を扱っていたことに変わりはないのである。

そしてこの大伝馬町界限が，まさに江戸における新興の書肆たちが営業していた場所でもある。とすれば江戸において出版界の第二世代として登場し，技術的にも整版を一般化させ，京都の書肆と繋がる独自の営業の仕組みを作っていた，進取の気性を持つ書肆たちは，江戸初期に江戸に進出した商人たちの一端であり，書肆以外の他の職種の商人たちの営業や流通の仕組みと一体となって発展していくなかで，京都の書肆に繋がる手がかりを見出していったと推測されるのである。そうした江戸初期の営業の在り方が，江戸後期の鈴木が指摘する小間物屋や薬種業との親和性につながると考えられる。しかも江戸後期の小間物屋や薬種業との親和性を有する書肆は，ほとんどが草紙類を扱っているのであり，物の本屋ではない。江戸に京都との繋がりをもって登場してきた書肆たちは娯楽に供する本を商品として開発した書肆たち，すなわち後に草紙屋となっていく書肆たちであり，この点においても整合性がある。草紙屋というカテゴリーの書肆が，木綿や小間物といった時代が要請

する商品と一体化した販売戦略のもとに営業を展開したとすれば、鈴木が指摘する江戸後期の書物の流通の素地は、江戸初期の出版界が形成されていく時期の市場構造のなかに萌芽していたといえるのである。こうした様相を考察する一例として、以下に奥州八戸藩の商人の事例を紹介してみたい。

### 八戸藩の出版事情

近世、八戸藩における書物の流通については小林文雄氏によって、天明年間には、八戸藩において、書物を共有する講である「書物仲間」が存していたことが紹介されている<sup>(7)</sup>。武士たちが出資して、国へ戻る武士や江戸詰め武士に依頼して書物を購入し、国元にも送ってもらい、その書物を講中で共有し、利用していたというのである。また小林は、安政六年に「群書交易助嵩文堂」という看板を掲げ、貸本業を行うものが現れたことを記す資料も紹介している（『多志南美草』——この資料については後述する）。この見料をとって貸し出す書物の入手先が江戸であることは、その記述に明らかであるが、たとえば八戸近郊の五戸において平成二十三年に発見された寺子屋の蔵書群には、版本の往来物も少なくないのであるが、そのなかには仙台の伊勢屋半右衛門版の往来物が散見される<sup>(8)</sup>。江戸より近い奥州仙台に書肆が存在し、その出版物の入手が可能であったことは、書物の入手先が複数であった点において、より八戸の書物環境を豊かにするものであったといえよう。また書物ではないが、少なくとも文化年間には八戸で暦の印刷が行われていた。岩手県洋野町種市歴史民俗資料館所蔵の柱暦『文化九壬申略暦』には「壬申正月十八日／八戸三日町 嘉吉開板」と記されている。暦は前年に摺刷されていると考えられるので、八戸に少なくとも文化八年間には印刷技術をもつ職人がいたことは確認できるのであるが、書物を印刷して販売するには、幕末の段階ではいまだ商売として成り立たない状況であったのであろう。

八戸の出版については、これまで江戸時代に書肆の存在は確認されず、もっぱら三都や仙台などの地方都市において出版された書物が地域の需要に応じていたと考えられてきたのであるが、今回、幕末の八戸の「書肆」を確認できる資料が出現した。架蔵本『江戸往来絵註抄』の奥付に八戸の書肆が記載されている。

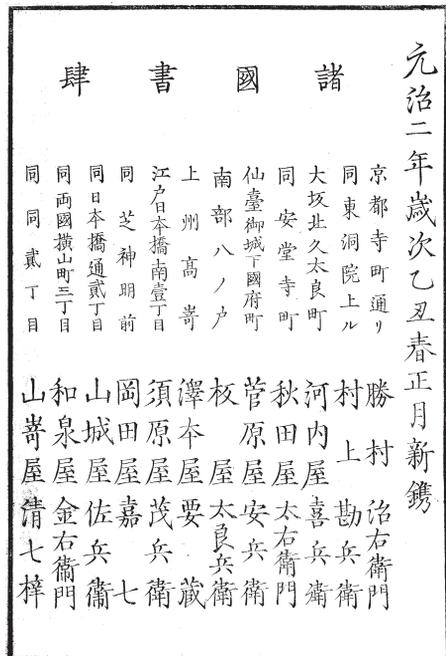
元治二年歳次乙丑春正月新鑄

諸	京都寺町通り 同東洞院上ル	勝村治右衛門 村上勘兵衛
---	------------------	-----------------

	大坂北久太良町	河内屋喜兵衛
	同 安堂寺町	秋田屋太右衛門
國	仙台御城下国府町	菅原屋安兵衛
	南部八ノ戸	板屋太良兵衛
	上州高崎	澤本屋要蔵
書	江戸日本橋南一丁目	須原屋茂兵衛
	同 芝神明前	岡田屋嘉七
	同日本橋通二丁目	山城屋佐兵衛
肆	同両国横山町三丁目	和泉屋金右衛門
	同 同 二丁目	山崎屋清七梓

この奥付に記載されている南部八戸の板屋太郎兵衛は、八戸の十三日町で営業していた浦山太郎兵衛という商人である。浦山家については、八戸市立図書館所蔵『浦山家文書』によってその一端を知ることができる。明治二十八年に作成された浦山家の家系図「家系之略」(『浦山家文書』1)によれば、初代太郎兵衛維基は越中国新川郡浦山村の産で、津軽郡板屋野木村に移住し、さらに宝永三年に八戸町に移住している。八戸に移住した際に「浦山」と称するようになり、「板屋」と号したという。この浦山太郎兵衛について、同じく八戸の商人大岡長兵衛が残した記録『多志南美草』<sup>(9)</sup>に、藩庁へ献納した賞賜者を紹介しているなかに、次のようなくだりがある。

金子五百両上納。居宅九間屋敷廿ヶ年の無役地。十三日町太郎兵衛此家は某子供の折は聊の小間物見世也。然共内福の評判をば請て有家也。祖父様は八戸一の謡上手。商は若き時より不得手由。(中略)か程の分限にて有ながら、慎み深く人の座上などは致事なく、別し



『江戸往来絵註抄』奥付

て我等には年の十五六も劣りて罷在れば、啗にも座上など、申義はなし。平日如此の心掛故、吉兵衛殿と内談にても火致しや、苗字帯刀などの義夢々願わず、内願して前条の御賞賜とは成たると見得たり。

この献金は元治元年のことらしい。『九戸地方史』<sup>(10)</sup>に掲載されている「元治元年八戸藩御用金賦課表」に「五百両 八戸十三日町 板屋太郎兵衛」と記載されている。ここからは太郎兵衛の商売が、本来小間物屋であること、藩庁に多額の献金をするほどの富裕な商人であったことが判明する。小間物屋としての営業が明治期まで続いていることは、『浦山家文書』に近代に認められた売り上げを記載した文書の存在からも明らかである（「扣」明治三十七年——『浦山家文書』13）。太郎兵衛の長男太吉（嘉永六年～大正三年）は、年少のころ盛岡藩の重要な港の一つであった野辺地町の野坂勘左衛門店で修業し、十五歳のとき明治維新を機に八戸へ帰り、父の後見のもと、野辺地で身に着けた鉋山業を始め、明治十二年、八戸一帯の商業資本を結集して海運と為替会社である八戸共商会を創立している<sup>(11)</sup>。一方で明治になっても浦山太郎兵衛が出版に携わっていることは、鈴木俊幸編『近世日本における書物・摺物の流通と享受についての研究』<sup>(12)</sup>に記載された以下のような書物の奥付にその名を連ねていることから明らかである。書名の後のカッコ内は奥付に共に名を連ねる書肆である。

- ・明治 9年 『作文捷徑』（山市兵衛・水野慶次郎・木村文三郎）
- ・明治 10年 『文体用弁纂要』（東生亀治郎）
- ・明治 13年 『論説記事簡牘文例』（後藤鋼吉・山中孝之助）
- ・明治 14年 『唐宋八家読本字類大全』（山中喜太郎）
- ・明治 15年 『夢想兵衛胡蝶物語』（東京稗史出版社）
- ・明治 16年 『絵本會我物語』（東京金玉出版社）
- ・明治 16年 『絵入実録西遊記卷一』（辻岡文助）
- ・明治 16年 『日本外史独学』（山市兵衛・山中孝之助）
- ・明治 17年 『絵本忠義水滸伝』（武田平治出版、菱花堂發兌）
- ・明治 17年 『論説記事簡牘文例』（山中孝之助・後藤鋼吉）
- ・明治 18年 『釈迦八相倭文庫 六十五編』（金松堂）

これらの奥付に認められる浦山太郎兵衛と出版との関わり方は、元治元年版『江

『江戸往来絵註抄』も含め、売弘書肆としてのそれであることはほぼ間違いあるまい。この浦山（板屋）太郎兵衛の例も鈴木が多くの事例を挙げたような、江戸後期に小間物屋と書肆を兼業した例といえよう。ところで鈴木には小間物屋や薬種業と書肆との関係についての考察とは別に、江戸の和泉屋市兵衛が江戸後期から明治にかけて需要の増していく往来物の販売ルートを、陸奥や越後、信濃、甲斐等に独占的に拡大していく様子についての考察がある<sup>(13)</sup>。江戸の和泉屋市兵衛以外はすべて地方の書肆が名を連ねる往来物の奥付が多く存在していることをその根拠とするのである。『江戸往来絵註抄』も往来物だが、和泉屋市兵衛の名は無く、代わりに岡田屋嘉七と日本橋南一丁目の須原屋茂兵衛がその名を連ねていることが注目される。岡田屋嘉七と須原屋茂兵衛が奥付に名を連ねる出版物は、たとえば金沢の書肆が関わる出版にも少なからず存在する<sup>(14)</sup>。和泉屋市兵衛が須原屋伊八のところから出た人物であることを考慮すれば、須原屋繋がり、そこに和泉屋市兵衛・岡田屋嘉七・須原屋茂兵衛という繋がりがあることが推測される。そこに須原屋が関わっていることによって、日本橋に存在する流通力を利用する仕組みが生じているのではないかと考えられるのである。それを裏付けるように、鈴木が例に挙げる、和泉屋市兵衛と奥付に名を連ねる往来物の地方売弘書肆は、多くは小間物業や薬種業と兼業する者たちである。小間物や薬種の流通ルートを利用して往来物の流通が行われていると考えられるのである。往来物の流通ルートの拡大が書肆独自に開発されたものではないことを示唆していよう。『江戸往来絵註抄』の奥付は地方の売弘書肆が少ない例で、八戸の板屋の他には仙台国府町の菅原屋安兵衛と上州高崎の澤本屋要蔵のみが地方の書肆である。鈴木が指摘する和泉屋市兵衛以外はすべて地方の売弘書肆で占められる往来物の奥付とはやや性格の異なる奥付ではあるが、明治になってから関わっている出版物の種類からも、また山中（和泉屋）市兵衛が共に奥付に記載されている書物が散見されることから、浦山（板屋）太郎兵衛は往来物・教科書販売の流通経路の一端であり、なおかつ小間物業も営む商人とみなすことができよう。

さて『浦山家文書』のなかに次のような書状が存している。

#### 覚

当院真綿之儀、拙寺国本よりハ少々下直ニ相見申候へハ、自用之勝手ニも相成り可申候ハバ存候に付ても貴様方へ買調給り候様ニ頼上候。尤代金拾兩相渡申候間、時々相場ニ順シ御調下候。勿論、右相頼候上ハ何事に付少も御心遣成事

無之候間、御心置被成間敷候。愈々相調候ハヽ、来月上旬迄ニ盛岡六日町齋藤小重郎殿迄御届ケ置被下候。依之道中差滞為無之、御紋付之御荷札一枚差置候間、右真綿荷物へ差添、盛岡迄御届被下候。右之段、御頼申候事無相違、為印以御書付如斯ニ御座候 以上

三州伊賀御社

社師

東光院 (印)

安永六年

酉六月十日

八ノ戸町

太郎兵衛殿

(「覚」——『浦山家文書』11)

上記の文面は、東光院が扱う真綿が安値であることをアピールし、買い上げてほしい旨が記された、板屋太郎兵衛と東光院との間で商取引が行われていることを示唆するものである。東光院は三河国額田郡岡崎の伊賀八幡宮のことである。この商取引にあたっては盛岡の齋藤小重郎なるものが仲介している様子がうかがえるのであるが、ここに三州の東光院、盛岡、八戸に営業上のネットワークが存していることがうかがえる。さらに東光院との交流に関する資料は、以下のようなものもある。

口演

兼々相頼置候当社御用之品々、早々調達給り、又候此度家来共差候○不相替出情相調給り候段、辱一入○○○至存致候。先達而相頼置候通り此上共ニ当社御用之趣出情相勤可給候。諸用之趣追々江戸表役所より可申越候間、左に可被思召候。先ハこの度礼書斗リニ如斯御座候

三州伊賀御社

酉九月二日

八ノ戸

浦山太郎兵衛殿

(「口演」——『浦山家文書』15)

ここに記されている「江戸表役所」というのは、伊賀と盛岡、八戸を結ぶ何らかの営業上の中継機関と考えられる。ここに伊賀・江戸・盛岡・八戸という流通のル

ートをみとめることができる。浦山太郎兵衛が越中の産であるという由緒書を信じれば、三州との繋がりはどうにして形成されたのかは不明だが、いずれにせよ上記の東光院の書状の内容から三州と営業上直接の繋がりがあることは確かである。換言すればこのネットワークは東海・江戸・奥州という、江戸の伊勢商人が有していた典型的な流通ルートとみなすことができる。三州は伊勢ではないが、伊勢近隣の繰綿や木綿の産地として伊勢商人が仕入れ先としていた場所なのである。伊勢商人は物流の拠点とした江戸や大坂などの大都市を中継して品物を仕入れ、主に関東や東北地方の広域にわたって移住し、販路を拡大することで堅固な営業体制を築いていた商人である。浦山が「書肆」を兼業する小間物屋で、なおかつ伊賀・江戸とも繋がりがあり、真綿を商品として扱っているなどの事実を考慮すれば、浦山の江戸の繋がり先は、大伝馬町界隈の伊勢商人ではないかという推測を可能にするのである。

ほかに八戸商人の実態の考察に格好の資料が、先にも引用した『多志南美草』である。この記録を残した大岡長兵衛家孝は近江商人の三代目で、天保九年から明治五年まで大岡家に起こった出来事を商売について、あるいは家族周辺のことについて書き記したのがこの『多志南美草』なのである。

その冒頭に大岡家の出自について次のように記している<sup>(15)</sup>。

されば、我等が先祖を尋るに、江州高島郡大岡宗七の男、幼名与吉系譜略あれ共、是を認んとて、事長く丁数の恐れあり。大岡氏の別書あれば爰に略すなり。右の与吉事十一才にして盛岡店江下り相勤罷在るに、右店は故有って休店と相成、其後、尚又、引起にて酒屋お礼金も半減に御憐頂戴のよし。夫にても、引立に可相成模様無之、竟に御引払と相成勤掛の者夫々引配の内より御主人の御撰に預り、当八戸店江廻され支配人まで相勤、首尾好退役、家銘暖簾並為元手金と五拾両為家移金と拾両上方親方より勤功たる為御褒美と御袖金三拾両都合九拾両の目録有けるを、酉の大火類焼の砌、用箆筒焼失其節右の目録を始、御用金差上候節の小高帳四、五冊外に古大帳並親代七戸貸帳面、不残焼失、依之、祖父なる人の寵、始より日記帳迄焼失に付ては三日町角屋敷を求め、家作等の義も、更に雲を宛なり。去れば、其妻なる人は、田名部能登屋四郎治と申仁の女にて、則七戸盛田喜平治妻の妹なり。(中略)されば此祖父なる人、寛延三庚午五月下る宝暦七丁丑二月初登りにて、同五月下り、且那樣より長兵衛と改下さる。明和三丙戌五月盛岡油町店引払に付、当店江来り(以下略)

これによれば大岡家は、江州の産で、奥州の地に商売のため移住し、盛岡を経由して最終的には八戸に落ち着いた近江商人であることがわかる。近江商人は企業経営の方法が合理的なことが知られているが、その一つとして出店を各地に設け、多様の業種を営むことで危険の分散と収益の平均化を企図する手法を確立している。大岡の場合は典型的な近江商人の営業方法で、江州の本店から盛岡や八戸に進出して商売を展開している例といえよう。『多志南美草』には、江州大溝に大塚屋村井家という本店があり、八戸の大岡家はその出店として営業していることをうかがわせる記事を随所に見出すことができる。たとえば天保十年には本店へ江戸・京都経由で出向いたり、弘化元年には本家の主人村井伊兵衛が突然、妻子を同道して大溝から八戸に下ってきたことなどが記されている。文中に「上方親方」と記述されているのが本家の主人である。

このようにみえてくると、その営業形態の在りようから浦山太郎兵衛は伊勢商人、大岡長兵衛は近江商人である可能性が高いといえる。そして書物の取次ぎをしているのが大岡長兵衛ではなく、伊勢商人と思われる浦山太郎兵衛であることが注目されるのである。しかし、当時の地元の記録において、浦山を書肆であると認識しているものを確認することはできない。八戸の人々にとって、浦山はあくまで小間物業であり、その扱う様々な商品のなかの一つが書物であるという位置づけであったのだろう。しかしながら商品である書物の奥付には「書肆」として記載されることになるのである。この八戸藩の浦山（板屋）の例も鈴木がいうところの江戸後期の小間物商売と出版業の親和性を物語る一例であり、加えて伊勢との関係をも示唆する一例といえよう。

## むすび

それでは何故、小間物や薬品と出版業はこれだけ関係が密なのか。それは東海と関東・東北を結ぶ流通の基点となっていた江戸において、木綿や繰綿、真綿類・小間物や薬種・書物といった商品を扱う問屋が日本橋の大伝馬町界隈に集中しており、それらの商品の流通は個別に独立せず、地方の需要に応じて一緒に流通する業態であったことに由来するのではないかと考えられるのである。そして江戸初期の大伝馬町界隈の商業成立の性格から、そこに伊勢商人の関与が推測される。江戸後期のこの界隈の様子をうかがわせる格好の材料が、鈴木が前掲論文で紹介している『式亭雑記』の次のくだりである<sup>(5)</sup>。

去年の歳暮より此春へかけて、三十八文見せといふ商人、大に行はれり。小間物類しな―をほしみに並べ置、価をば三十八文に定めて商ふ事也、或は、塗り枕、あぶりこ、櫛、かんざし、茶ほうじ、小児の手遊道具類、何彼と差別なく仕入置て、四辻、橋詰などに、むしろ敷たる店を構へて、売声すぐれていさぎよく、神事、法会の場合には、両側のきを並べて、三十八文と呼ぶ、ことに夏にいたりてもいまだ流行して、町々の辻々に、絶ず此店せあり。彼商人が呼び声にいはいはく、

なんでもかでもよりどって三十八文、あぶりこでも、かな網でも三十八文、ほうろくに茶ほうじ添て三十八文、銀のかんざしに小まくらつけて三十八文、京伝でも三馬でも、よりどつけて三十八文云々。

此、京伝でも三馬でもといへるを聞て、いぶかしさに立ちよりみれば、三年このかた古板になりし、絵ぞうし合巻の事也、此合巻ぞうしは、さうし問屋のぼらし物を仕入れ置て、小間物問屋よりおろし売りせり、○塩町物と通称して、此たぐひの小間ものは、通塩町、又は油町杯の小間もの問屋よりおろすと云々

ここでは雑貨を何でも三十八文で売る行商の商売が流行した際、そのなかに古版となった絵草紙や合巻などのぼらし物を小間物問屋より卸して販売している様が記されているが、その問屋というのが通塩町、油町にあるというくだりが注目される。油町は大伝馬三丁目に続く町で、地図によって同じ場所が通油町と記されていることも、また場所がやや異なる場所になっていることもあるが、いずれにせよ大伝馬町界限と一括りにできる地域である。塩町は通油町に続く町である。ここからは江戸後期においても通油町や大伝馬町の界限が草紙問屋の多い場所であったと同時に、小間物商売の問屋も営業し、なおかつ両者は書物という商品において繋がっている様子をうかがうことができる。さらにこの大伝馬町には薬種業も多く営業していた。東京大学経済学部所蔵『白子屋文書』によって、菱垣廻船積仲間に「大伝馬町薬種店組」という問屋仲間が存在していたことが明らかにされている<sup>(6)</sup>。組名から大伝馬町界限に薬種問屋が複数存在していることは明らかであろう。薬種の商売が大伝馬町界限に定着していることも、これらの商品を扱う商人が、江戸初期江戸の大伝馬町界限で営業を始めた時期に、諸色問屋として諸種の商品を扱っていたことに由来するものと考えられるのである。

『式亭雑記』のこの記事は、江戸初期に形成されたこの界限の営業形態、すなわち小間物屋などの諸色商売と書肆が一体となって営業手法や流通機構を形成し、発

展した営業形態が、そのまま存続していることを示唆するものといえるのではなからうか。

他の都市に関しては、たとえば大坂の書肆は、「鋳屋佐平」や「象牙屋三郎兵衛」・「笠屋佐兵衛」など、書肆とは異なる商売を思わせる屋号が少なくなく、塩村耕によって大坂の人形屋と書肆との親和性も指摘されている<sup>(16)</sup>。書肆が何か異なる職業と兼業で行われている可能性を思わせる事実であろう。また金沢の書肆が関与する出版物には岡田屋嘉七と須原屋茂兵衛が奥付に名を連ねることが多いことは既述したが、こうした現象も背景に書物以外の商品の流通を利用する仕組みが出来上がっていることを思わせるのである。ちなみにこうした金沢の書肆と岡田屋・須原屋が奥付に名を連ねる出版物は往来物とは限らない。日本橋辺に存在した流通力が出版において利用される場合、往来物の販路とは別種のものとしても機能している可能性もここに指摘できるのである。その都市によって異なる商人の背景や商売の手法、それらをもたらず都市の性格の違いなどが、書肆という商売の在り方にも影響しているということであろう。

## 注

1. 柏崎順子「江戸版出版以前の出版界」（『言語文化』第53巻、一橋大学語学研究室2017年3月）
2. 鈴木俊幸『蔦屋重三郎』（若草書房、1998年11月）
3. 後藤隆之『伊勢商人の世界』（三重県良書出版会、平成二年九月）
4. 柏崎順子「江戸初期出版界と伊勢」（『人文・自然研究』第六号、一橋大学大学教育研究開発センター、2012年3月）、柏崎順子「伊勢と俳諧」（『人文・自然研究』第八号、一橋大学大学教育研究開発センター、2014年3月）、柏崎順子「江戸版から見る一七世紀日本」（シリーズ〈本の文化史〉2『書籍の宇宙——広がりと体系』、平凡社、2015年5月）等。）
5. 鈴木俊幸「近世日本における薬品・小間物の流通と書籍の流通」（『中央大学文学部紀要』214号、2007年3月）
6. 林玲子『近世の市場構造と流通』（吉川弘文館、2000年12月）
7. 小林文雄「武家の蔵書と収集活動——八戸藩書物仲間の紹介」（『歴史評論』六〇五号、2000年9月）
8. 藤田俊雄・熊谷隆次編「盛岡藩寺子屋師匠三明院関係資料」（『東北文化資料叢書』第10集（東北大学大学院文学研究科東北文化研究室、2017年3月）
9. 原本は八戸市立図書館所蔵『多志南美草』五十卷四十二冊。引用は『みちのく双書』第二十八集～三十一集『多志南美草』（青森県文化財保護協会、昭和四十五年七月）から行った。

10. 『九戸地方史』（九戸地方史刊行会，法政大学出版局，1969年8月）
11. 『青森県人名辞典』（東奥日報社，平成14年8月）の「浦山太吉」の項目による。
12. 鈴木俊幸編『近世日本における書籍・摺物の流通と享受についての研究』（1996—1998年度科学研究費補助金「基盤研究（C）」研究成果報告書，1999年3月）に拠る。
13. 鈴木俊幸『江戸の読書熱——自学する読者と書籍流通』（平凡社選書227，平凡社，2007年2月）
14. 竹松幸香『近世金沢の出版』（桂書房，2016年6月）
15. 『多志南草』には前掲の活字本とは別に平成十八年大岡達夫氏が翻刻した別本が存在する。『みちのく双書』本は重複している記事が省略されるなど，若干編集が行われているが，大岡本は原本に忠実に翻刻したものであるが，該本は出版されておらず，八戸市立図書館に非売品の印刷本が所蔵されている。本部分はこの大岡本から引用した。
16. 塩村耕編『古版大坂案内記集成』解説（和泉書院，1999年）

浦山太郎兵衛に関する資料については，前八戸市立図書館館長藤田俊雄氏にご教示いただきました。また『浦山家文書』の解説についてもご助力をいただきました。記して深謝申し上げます。